

# 第1章 原の辻遺跡の位置と環境

松本圭太

## 1. 地理的環境

原の辻遺跡は長崎県壱岐市芦辺町に所在する。壱岐市は長崎県に属するが、博多から約67km、東松浦半島から北北西に約20kmの玄界灘上に位置する。また、西北へ70km程度で対馬、120km程で釜山に達し、防人の設置や元寇の被害に示されるように、大陸との交渉において古来重要な位置を占めてきた（図1）。

島の規模は南北17.2km 東西14.8km で総面積約139km<sup>2</sup>である。海岸線は入り組んでいる一方、地形は比較的平坦であり、その地質は大部分が玄武岩類によって構成されている。こうした平坦な地形は、壱岐島と釜山の間に位置し、山地が多くを占める対馬とは対照的である。壱岐島の分水嶺は西に偏り、二大水系として、北部では谷江川、南部では幡鉾川が知られる。後者は壱岐島最大の川であって、下流域には河内盆地が広がり、中でも深江田原は、諫早平野に次いで長崎県第二の広さを誇る天然の沖積平野である。この深江田原の小高い丘陵を中心に、原の辻遺跡は所在する。これは、東亜考古学会によって調査された同島のカラカミ遺跡が、周辺に農耕地が存在しない丘陵頂部に位置することと、対比をなしている。

原の辻遺跡の丘陵では、江戸時代から昭和前半頃までは畑土を高く盛り上げた饅頭畑が見られ、このことは東亜考古学会の調査写真によっても知られる。しかしながら、ブルドーザーによる整地などによって、現状では標高17mを最高点とする平地化が進んでいる。長岡信治氏らによると、本丘陵の表層地質は以下のように区分される。丘陵先端部の高元地区には玄武岩 E、原地区から苅ノ木地区、原の久保地区、鶴田地区には礫層 B、丘陵中央部には玄武岩 F、大川

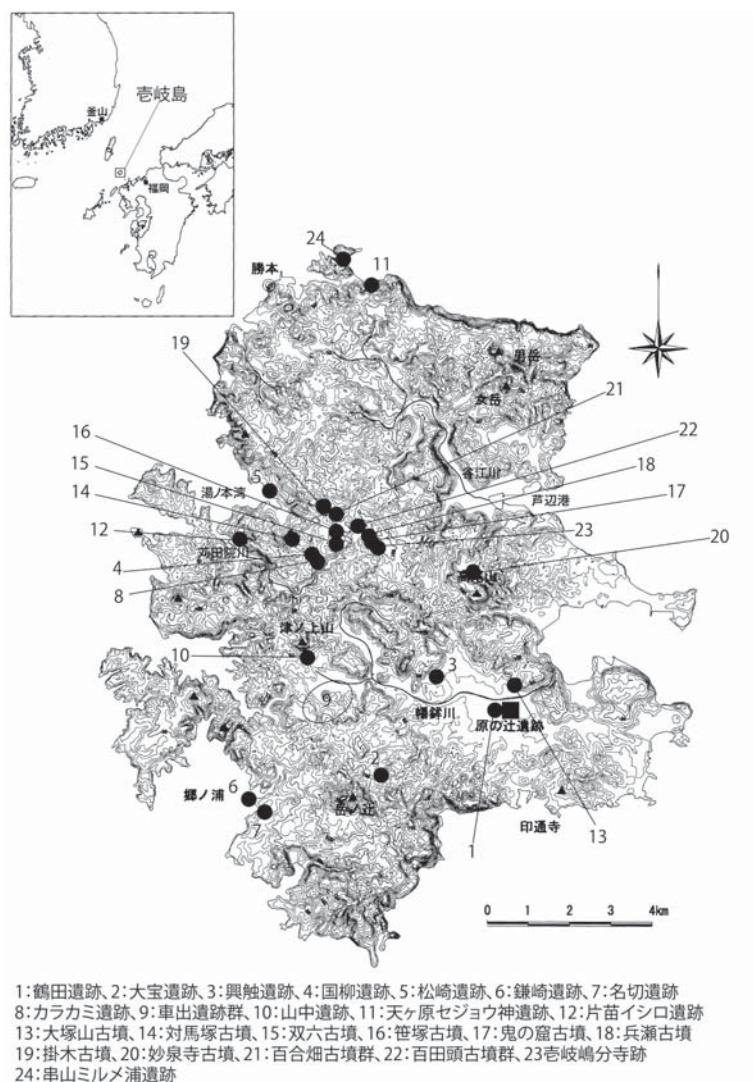


図1 壱岐島の位置と遺跡分布図（本章言及分のみ）  
（福田・中尾編2005を改変）

地区、柏田地区にかけては玄武岩 D が分布する（長岡ほか 2005）（地区名は図 2 参照）。本丘陵上の旧石器時代の包含層は全て礫層 B 部分にあたり、縄文時代の包含層は知られていない。この背景について、後世の削平以外に、風化土層の形成速度が遅く厚い土層形成がなかった可能性が指摘されている。

## 2. 歴史的環境

### 1) 旧石器時代～縄文時代

壱岐島最古である鶴田遺跡（図 1-1）は、ナイフ形石器文化中期、始良 Tn 火山灰（AT）降下の直前（約 30000 年前）に遡る。この段階は、最終氷期極大期に相当し、海水面が現在より 100m 以上低く、壱岐と九州本土は陸続きであったと考えられている。特に、原の辻遺跡、鶴田遺跡、大宝遺跡（図 1-2）では原位置を保ったブロックが検出されている。また、原の辻遺跡では 1992・1995 年の河



図2 原の辻遺跡各地区と東亜考古学会調査のトレンチ  
（松見編2013を改変）

川改修工事に伴う調査で「ナウマンゾウ・オオツノジカ」が発見されたが人工遺物との共伴関係は確認できなかった。また、AT 降下以降の遺跡としては、興触遺跡（図 1-3）、カラカミ遺跡、国柳遺跡（図 1-4）などを挙げることが出来、重要な石器器種として、原の辻型台形石器がある。

壱岐島全体では 20カ所ほどの縄文時代の遺跡が知られ、島の南西から西海岸に集中している。また、これらの遺跡は潮間帯に存在する。松崎遺跡（図 1-5）は曾畑式土器、阿高式系土器が多くを占めるが、半島系の隆起文土器や太線沈線文土器が確認された（古澤 2014）。

鎌崎遺跡（図 1-6）と名切遺跡（図 1-7）は共に郷ノ浦町に存在し、現在は新田によって分断されているが、本来は一体の遺跡である。名切遺跡では縄文時代中期から後期にかけての堅果類貯蔵用堅穴「どんぐりピット」が 30基確認された（長崎県教育委員会 1985）。深さ 1m 程度の内部は湧水に満たされ、堅穴底面からは堅果類が、埋土からは石皿や礫石が出土した。また、同遺跡出土の黒曜石には、壱岐産のほか、佐賀県腰岳産のものも含まれ、当時の交流を示すものとして注目されている。鎌崎遺跡は、出水式土器や多様な石器が表面採集された。特に、全体が直角三角形形状を呈し、底辺にゆるい弧状刃部を附すスクレイパーは、鎌崎型スクレイパーと呼ばれる。



なお、原の辻遺跡でも坂の下式土器や局部磨製石鏃、鎌崎型スクレイパーなどが出土し、縄文時代後期前葉を中心とする土地利用が想定されるが、遺構などは確認されていない。

## 2) 弥生時代

弥生時代の遺跡は約60カ所におよぶが、これらのうち、大規模集落かつ大陸との交渉を示す遺物を含む豊富な資料が出土した原の辻遺跡、カラカミ遺跡(図1-8)、車出遺跡群(図1-9)は、とくに重要な遺跡として認識されてきた。

まず、本報告の対象となる原の辻遺跡について、『原の辻遺跡総集編Ⅱ』(川道・古澤編2016)における段階区分(図3)を参照しながら記述する。先述のように本遺跡は深江田原に位置する。本遺跡最古の遺物は板付Ⅱ式であり、それ以前の遺物は確認できないことから、弥生時代前期後葉から前期末にかけて突如として集落が形成されたと考えられる(図3左上)。この時期の生活関連遺構は丘陵の先端部(高元地区)に集中している。原の辻遺跡の立地する丘陵部周辺は、冬季には厳しい北西風が吹き込み、生活しやすい場所ではない。この場所にあえて集落を形成した背景の一つとして、船待ちのできる内海湾への連結が容易である立地であることなどから、対外交流を目的とした可能性が挙げられている(宮崎2001、川道・古澤編2016)。この時期の墓域は、丘陵の最頂部付近(原地区)に形成され、後にこの丘陵を越えて南東側に広がる別の丘陵部(大原地区)へと移動する。これらとほぼ同時期に位置づけられる墓群が、丘陵先端部から北に300m程度の場所に位置する原の辻閨繰遺跡である。当該遺跡は東亜考古学会によって1954年に調査され、6基の列状配置の石棺墓と16基の小児用甕棺墓が発見された。年代は前期末から中期前半に及ぶ(宮本編2018)。また、1995年には1954年閨繰遺跡調査区の西北において、長崎県教育庁による調査の結果、中期後半を主体とする石棺墓、石蓋土壇墓、土壇墓、甕棺墓が発見された(安楽編1999)。閨繰遺跡の両調査地点を別の墓域とすれば、丘陵上の墓域を含めて、原の辻遺跡全体では10地点の墓域が存在したことになる。こうした各墓域は、それぞれが氏族墓地であった可能性がある(宮本編2018)。

中期初頭から中期中葉は、前段階に形成された集団が丘陵部全体に拡大し、丘陵全体が居住域として利用されるようになる(図3右上)。丘陵を囲うように環濠が、西側に船着き場が形成される。船着き場では版築や、矢板による土流出の防止など、当時の最先端技術が窺える。さらには粘土帶土

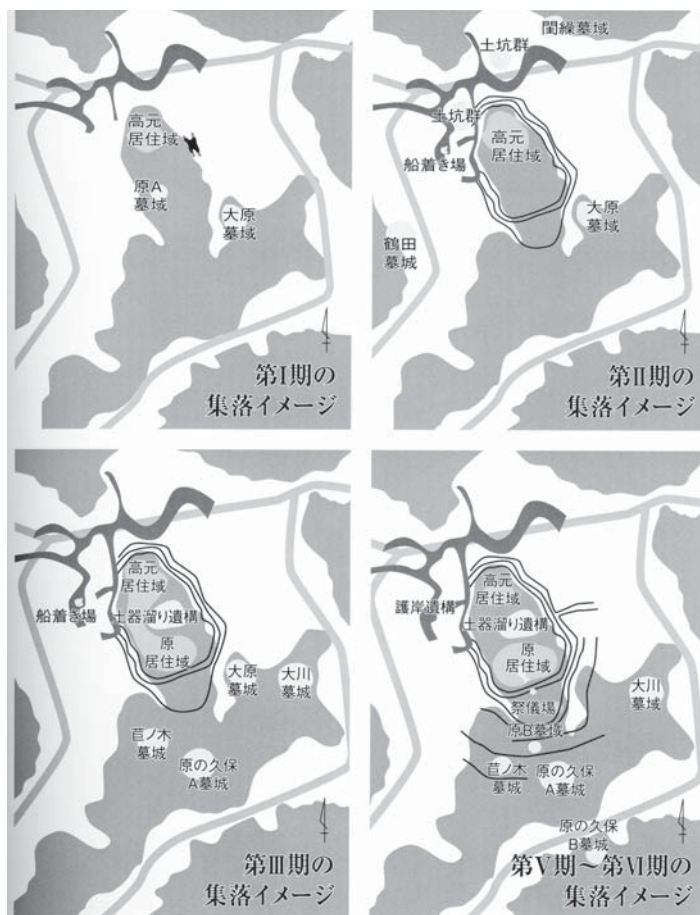


図3 原の辻遺跡における集落の変遷  
(松見編2013より転載)

器・擬粘土帯土器など多くの外来系遺物の搬入が見られ、渡来人の存在が顕著になる。墓域では、先に挙げた大原地区において、墓坑に周溝を巡らす墓も築造され、弥生時代中期になると細形銅剣や蜻蛉玉などが副葬される墓も出現する。

中期後葉～中期末には、集落の規模が拡大する（図3左下）。同時期には、幡鉢川の上流部に形成された車出遺跡群、さらには北西部の山地にカラカミ遺跡が形成された。墓域の拡大も見られ、環濠に近い大原地区から、比較的遠い大川地区、原の久保地区・萱ノ木地区へ墓域が広がっていく。船着き場も存続しており、周辺から三翼鏃や五銖銭を含む大陸・半島系遺物が多数出土した。小規模な鉄器・青銅器生産は行っていた可能性があるものの、大規模な工房などの存在は確認されていない。

後期前葉に原の辻集落は一時衰退し、弥生時代中期初頭に築造された船着き場が解体され、環濠も埋まる。低地部に堆積した粒子の細かい砂粒を含む灰白色の粘土質の土層から、大規模な水害によって低地部の殆どが水没した可能性が推定されている。こうしたことを背景に、原の辻遺跡の集団がカラカミ遺跡や車出遺跡群に移動したことが考えられている（川道・古澤編2016）。後述のように、カラカミ遺跡や車出遺跡群では、中期中葉に集落が形成され、弥生時代後期以降に盛行する。

後期中葉から後期後葉には丘陵部に生活拠点に戻り、環濠も再掘削された（図3右下）。丘陵頂部では祭儀場と呼ばれる祭祀的空間が形成され、建物の配置にも計画性が窺える。墓域は中期後葉～中期末に存在したものが拡大し、原の久保地区の墓域では、径20cmを超える内行花文鏡や小形仿製鏡が、大川地区の墓域からも銅釧や鉄矛などが見つかった。

古墳時代前期には、集落の解体が始まる。解体の一つの原因は、交易のルートの変化である。古墳時代前期以降には、博多湾沿岸に交易の拠点が移ったのであった。カラカミ遺跡や車出遺跡群の集落も大体同時期に衰退している。

次に、壱岐島西北の拠点集落であるカラカミ遺跡をみよう。カラカミ遺跡は弥生時代中期後葉から後期後半まで存続する。カラカミ遺跡も原の辻遺跡同様、東亜考古学会によって調査された経緯があり、学史的に古い段階から大陸交渉において重要な遺跡であることが認識されてきた。周辺が可耕地である深江田原に立地する原の辻遺跡に対し、丘陵頂部に位置するカラカミ遺跡周辺には可耕地が存在しない。一方で、遺跡南側の刈田院川を下ると湯本湾に達することから、漁撈活動が可能な立地であり、このことは本遺

跡土層出土の魚貝類や骨角器によっても窺える。また、鉄器生産遺構や土器の胎土分析から、原の辻遺跡とは異なる、カラカミ遺跡独自の交易網の存在が指摘されている（宮本編2013）。

カラカミ遺跡は環濠の掘削に基づく、大きく二段階に分けることができる（図4）（宮本2022）。弥生時代

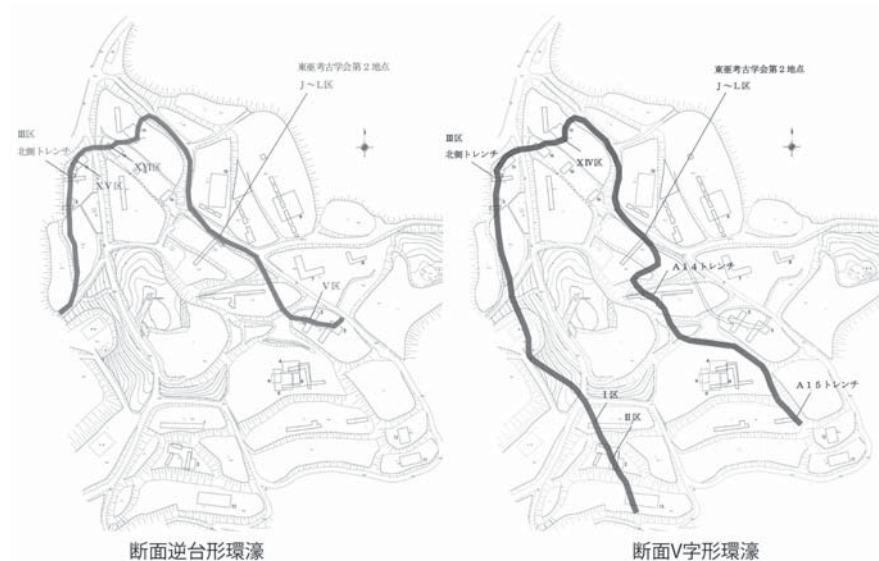


図4 カラカミ遺跡における環濠の変遷  
（宮本2022を改変）

中期後葉（須玖Ⅱ式段階）には、断面逆台形環濠が掘削され、現状ではカラカミ神社の丘陵を中心とした地域の北側を大きく囲んでいる（図4左）。環濠内の東側では、鍛冶炉を持つ可能性のある住居址群が発掘された。また、本遺跡第2地点（東亞考古学会調査、小川貝塚）出土の細頸壺は、この段階（紀元前1世紀頃）の楽浪土器である（宮本2020）。

断面逆台形環濠の廃棄・埋没後、掘り直され、弥生時代後期（高三瀝式から下大隈式段階）に主に使用されたのが、断面V字形環濠である（図4右）。遺跡北部では、前段階の断面逆台形環濠に沿う形である一方で、東西いずれでも南下していく様子が確認できる。前段階よりも若干西側で鍛冶炉が見つかったほか、北側の環濠外ではベンガラ生産がなされていた（村上ほか2019）。また、同地点からは、「周」銘文を持つ瓦質系の折腹盆が出土したが、遼東・山東系土器であり、後漢中・後期に相当し（宮本2020）、下大隈式に併行する。こうしたものは、カラカミ遺跡の集団が、交易を生業の一つとしていたことを示すものである。

カラカミ遺跡と同じく、中期後葉から後期後半まで存続し、壱岐島の中心部に位置するのが車出遺跡群である。本遺跡群は、原の辻遺跡を流れる幡鉾川上流5kmの小さな平野部に位置する。本平野部を取り囲むように、車出遺跡、大谷遺跡、戸田遺跡、田ノ上遺跡、鉢形遺跡が登録されていたが、調査の結果、ほぼ同時期の遺跡と判明し、車出遺跡群と総称される。集落の実態は解明されていない部分が多いが、方格規矩鏡、小型仿製鏡、貨泉などの青銅器（安楽編1998）のほか、壱岐独特の石製支脚であるクド石が多く出土している。近年の調査では、1地点から50個体分を超える袋状口縁壺、さらには鉄関連資料が発見されるなどの成果が得られている（田中・松見編2022）。また、本遺跡群に含まれる墓地と考えられるのが、山中遺跡（図1-10）であり、車出遺跡群の西北400mに位置する。甕棺墓2基、箱式石棺墓1基などが発掘され、甕棺墓は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭頃に位置づけられる。箱式石棺墓からは碧玉製勾玉や鉄剣が発見され、3世紀末から4世紀中頃とされている（白石編1999）。

以上の3遺跡以外では、壱岐島北部の砂州状に延びる海岸部に位置する、天ヶ原セジョウ神遺跡（図1-11）が特筆される。海岸波打ち際の石祠の下、地下80cm程度から中広形銅矛3本が発見された（岩永1985）。埋納時の配置法は不明であるが、対馬と対照的に銅矛の出土例が少ない壱岐にあって貴重であり、対馬との関係を考える上でも重要である。当時の壱岐島の様子を、『魏志』倭人伝は、「方可三百里、多竹木叢林、有三千許家。差有田地、耕田猶不足食、亦南北市糴」（広さは三百里四方で、竹や木の茂みが多く、三千ほどの家がある。田畑は少しあるが、耕作地が不足しており、南北に海を渡って食料を買い入れている）と記している。特に「南北市糴」は上述の原の辻遺跡、カラカミ遺跡、車出遺跡群に見られた、対外交渉の様子を髣髴とさせるものであり、その後の壱岐の歴史をも貫くものであった。

### 3) 古墳時代～古代

原の辻遺跡では古墳時代前期の3世紀後半から4世紀前半にかけての竪穴住居址、片苗イシロ遺跡（図1-12）では古墳時代中期の5世紀前半の竪穴住居址が発見されている（平川編1987）ものの、壱岐島における古墳時代の生活遺跡は限られたものである。また、墳丘を伴う前期古墳の存在は確認されておらず、5世紀後半における大塚山古墳（図1-13）が最古の古墳となる。大塚山古墳は深江田原の北側に位置する、竪穴系横口式石室を持つ円墳であり、直径約14m、高さ約1.4mを測る（山口編2012）。

6世紀中葉以降には、前方後円墳である対馬塚古墳（図1-14）、双六古墳（図1-15）が築かれ、その周辺で6世紀末から7世紀前葉に、笹塚古墳（図1-16）、鬼の窟古墳（図1-17）、兵瀬古墳（図



1-18)、掛木古墳(図1-19)が造営されるようになる。以上の6基が国史跡の壱岐古墳群であり、島中央部の国分から亀石地区を中心に分布している。さらに、これら古墳の周辺には多数の群集墳が築かれている。対馬塚古墳は湯本湾を見下ろす標高90~100m程度の丘陵上に位置し、墳丘の全長は63mである。2室構造両袖式の横穴式石室を持ち、石室内2か所に線刻による装飾がある。須恵器を含む土器類の他、武器・農耕具・馬具などの鉄器やガラス製品が見つまっている。双六古墳の墳丘長は91mで、長崎県下最大規模である。2室構造の両袖式横穴石室に、短い羨道部が付属する。前室右側壁に線刻による船の装飾が見られる。土器類のほか、金銅製単鳳環頭大刀柄頭、金銅製圭頭大刀柄頭などを含む数多くの遺物が発見された。笹塚古墳、鬼の窟古墳、兵瀬古墳、掛木古墳はいずれも円墳である。鬼の窟古墳は、1953年における本報告の原の辻遺跡第2次調査と同時期に、東亜考古学会によって調査された経緯を持つ。直径45m、墳丘高13mの円墳であり、複室両袖型横穴式石室を持つ。出土遺物としては土器類の他、鉄鏃などがある。出土須恵器から考えると、初葬が6世紀後葉~末、追葬が7世紀代を通じて行われたと考えられている(宮本編2018)。これらの壱岐古墳群は、6世紀後葉~末の島内における古墳の秩序では、最上位に位置づけられる。

鬼の窟古墳と同様の複室両袖型横穴式石室を持ちながらも、全体的に小型化した様相を呈するのが、墳径約16mの妙泉寺7号墳(図1-20)であり、壱岐古墳群に準ずる上位層の所産と考えられる。妙泉寺古墳群は鬼の窟古墳から東に2.5km程度の距離にあり、東亜考古学会の調査では1号墳から8号墳までの存在が確認されている。7号墳からは土器類のほか、刀剣や農耕具などの鉄器が出土している。墳丘や石室の規模から考えて、妙泉寺7号墳のさらに下位に位置づけられるのが、百合畑古墳群(図1-21)や百田頭古墳群(図1-22)といった群集墳である。前者は前方後円墳5基、円墳16基などで、後者は円墳8基で構成される。このような6世紀後葉~末の島内における古墳の集中的造営には、最上位の壱岐古墳群で多くの新羅土器が出土していることを考え併せると、当時の対新羅をめぐる軍事的緊張関係の増加が影響しているといわれる(宮本編2018)。

こうした古墳の造営は7世紀前半には減少し、7世紀中葉前後に一旦終焉を迎える。7世紀後半には、663年の白村江の戦いにおける敗戦によって、壱岐に烽と防人が置かれた。また、『延喜式』などの記録によると、7世紀末頃から存在していたと考えられる壱岐直の氏寺が整備され、8世紀後半以降に壱岐嶋分寺(図1-23)が成立した。壱岐嶋分寺跡出土の軒丸瓦は、平城京出土品と同範であることが知られている(高野編1991)。嶋分寺跡は壱岐古墳群の近くに位置し、この付近が壱岐島の政治的中心であり続けたことが知られる。また、古代の遺跡として知られる、島北端の串山ミルメ浦遺跡(図1-24)では、卜占に使用された亀卜甲と大量のアワビ貝殻が出土した。亀卜甲は平安時代に朝廷に出仕した壱岐卜部を示唆するものである。原の辻遺跡では、越州窯系青磁や白磁などの初期貿易陶磁器が出土している(山下・川口編1997)が、川原畑地区では古代の道路状遺構が検出され、壱岐国成立前後の8世紀初頭の施工年代が推定される(山下・川口編1997)。さらに、高原地区では5点の木簡が出土し、官街内の活動を示すものと考えられている(平川1995)。これらは、その出土地点と、初期国府比定地の大川地区や印通寺港を結ぶ、当時の駅道を考える上で示唆的である一方、明確なルートの復元については保留されている(河合2021)。

平安時代の寛仁三年(1019)には刀伊の入寇があり、鎌倉時代の文永(1274)・弘安の役(1281)でも壱岐は大きな損害を被った。また、14世紀後半には倭寇の根拠地の一つとなった。このように、原の辻遺跡やカラカミ遺跡に顕著に現れる大陸との交渉は、その後の壱岐の歴史においても一つの軸をなしていたことが理解されるのである。

## 引用文献

- 安楽勉編1998『車出遺跡』長崎県教育委員会・郷ノ浦町教育委員会
- 安楽勉編1999『閨繰遺跡』長崎県教育委員会
- 岩永省三1985「天ヶ原遺跡出土の銅矛について」『串山ミルメ浦遺跡』長崎県勝本町教育委員会、17-22頁
- 河合恭典2021「官道をゆく～古代律令制度下における壱岐国の体制～」『古代世界の中の壱岐』壱岐市教育委員会、76-110頁
- 川道寛・古澤義久編2016『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター
- 白石純悟編1999『山中遺跡』郷ノ浦町教育委員会
- 高野晋司編1991『壱岐嶋分寺1』長崎県芦辺町教育委員会
- 田中聡一・松見裕二編2022『車出遺跡群1次〔Ⅰ区・Ⅱ区〕久保頭古墳・双六古墳隣接地』長崎県壱岐市教育委員会
- 長岡信治・鳥井真之・林信雄2005「原の辻遺跡周辺の地形地質」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』長崎県教育委員会、1-13頁
- 長崎県教育委員会1985『名切遺跡』長崎県教育委員会
- 平川敬治編1987『片苗インロ遺跡』勝本町教育委員会
- 平川南1995「長崎県壱岐郡原の辻遺跡出土の木簡」『原の辻遺跡 幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会、1-7頁
- 福田一志・中尾篤志編2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』長崎県教育委員会
- 古澤義久2014「玄界灘島嶼域を中心にみた 縄文時代日韓土器文化交流の性格」『東京大学考古学研究室研究紀要』28、27-80頁
- 古澤義久2017「壱岐市名切遺跡出土韓半島系土器について」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号、pp48-58
- 松見裕二編2013『原の辻遺跡一原の辻遺跡出土資料集成一』壱岐市教育委員会
- 宮崎貴夫2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』4、53-79頁
- 宮本一夫2020「遼東・山東系土器と楽浪系土器からみた弥生時代後半期の国際関係」『史淵』第157輯、31-55頁
- 宮本一夫2022「カラカミ遺跡から広がる交流ネットワーク」『カラカミ遺跡 総括編Ⅰ』長崎県壱岐市教育委員会、457-491頁
- 宮本一夫編2013『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 宮本一夫編2018『壱岐原の辻閨繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 村上恭通・中西眞・高田潤2019「カラカミ遺跡で検出したベンガラ焼成炉について」『市史跡カラカミ遺跡6次 市史跡カラカミ遺跡7次 国特別史跡原の辻遺跡』長崎県壱岐市教育委員会、179-187頁
- 山口優編2012『壱岐の島の古墳群～現状調査』長崎県壱岐市教育委員会
- 山下英明・川口洋平編1997『原の辻遺跡・安国寺前 A 遺跡・安閣寺前 B 遺跡』長崎県教育委員会